小鳥たちの計画

BIRDS PLAN
ARAUCHI YU

荒　内　佑

筑摩書房

小鳥たちの計画　目次

小鳥たちのボイジャー計画　7
電線の上でぼくらは出会うべき　11
誰とも共有されなかった夜について　16
By chance, David　21
秘儀　25
現在位置ちょっと確認　29
戦場のｉＰｏｄとこの世界の片隅に　34
鳩のロースト　39
東京の地図　45
Ａになる　51
俺のサブスク元年　56
w-inds. から考える音楽とメディア　62

コンロンナンカロウと言ってみた　67
ユーウツ音楽講座　71
アメリカン　ベラ・ノッテ　76
「俺」と「僕」問題　83
iPhone SF　88
イメージの本の亡霊　93
ブラジルの手話教室を想起するまで　98
ピルグリム　102
僕はプールに行くようになった　109
二十世紀の最後、ぼくはヤンキーから走って逃げていた
郊外の子供たち　118
Sweet Revenge　123
不健康な美しさ　128
二〇一四年宇宙の旅／火星からアルタ、近過去へ　133

サマー・ナーヴス　138
Twinkle, Twinkle, Bound 2　142
（ア）シンメトリック・ビューティ　147
風邪の効用の応用　151
二〇〇八年に昭和を感じた　157
ブック・ビルディング　163
何て小さな思考が　169
真理子のブルース　174
珈琲ノスタルジア　179
自販機の計画　185
「37回　宇　ンチ」　190
南風の吹く七日間とオリンピック

装丁　柳智之

小鳥たちのボイジャー計画

誰かが喫茶店やファミレスで、家で、公園で、車の中で、歩きながら、ピーチクパーチク喋っている。「tweet」が「小鳥のさえずり」ではなく「つぶやき」と意訳されるずっと前からだ。

与太話に限らず、音楽の構想、創作小話、社会について、加えて大学教授が聞いたら気絶しそうな信憑性が全くない哲学の議論、学者が聞いたら失神しそうな独自すぎる文学論、評論家が聞いたら苦すぎる苦笑をするだろうトンデモ映画論、それらの当てずっぽうな接続と切断。つまりはどこにでもいる、何かを作ろうとしているけれど何者でもない子供のさえずり。ひとまずそれを小鳥たちの計画と呼んでみる。ソ連の

スプートニク計画とか、池田勇人の国民所得倍増計画とか、ロブ＝グリエのニューヨーク革命計画とか思い出すと何か目論見でもあるようだけど、小鳥たちは目的もなくただただ喋っている。時折そんなさえずりから無責任な計画が立ち上がってしまう。

甲州街道沿い、東京の郊外にある国立府中インターチェンジ近くの「ガスト」。そこへ深夜に友達と二人で行ったのはずっと前のことだ。その店舗はあの眠そうな目をしたヒバリが描かれた旧「すかいらーく」の一号店として知られている（TM NETWORKの結成地としても一部では有名）。最寄り駅から歩いていくには遠く、車も持たない自分たちがどうして深夜に郊外のガストに行ったのか、それは未だに謎だ。はっきりしているのは自分たちは今よりずっとヒマで無限に時間があった。いつのことかは忘れてしまったが、明確なのは二〇一一年よりも前のことだった。

郊外のファミレスといえば、ヤンキーが頼んだ山盛りポテトフライ、長距離運転手の仮眠、恋人たちの痴話喧嘩みたいなものが空気のように漂っている。エドワード・ホッパーの「ナイトホークス」（夜鷹＝宵っ張り）のように、闇夜に浮かぶレストランは時折、宇宙空間を彷徨う探査機を思い出させる。僕らは甲州街道が見える窓際の

席に陣取ってドリンクバーを注文し、しばらくすると、どちらからともなく架空の映画のプロットを考えることになった。インターの近くだったし、国道を見ていたら思いついたのかもしれない。自分たちが考えた映画は、東京を中心にして関東一帯に大地震が来る、という設定だった。地震によって東京は壊滅し、ライフラインが途絶える。主人公はそれほど被害が大きくなかった静岡の御殿場に住んでいるカメラマンで、東京の友人たちを車で救助に向かう、というロードムービー。しかし、途中で車はガス欠になり山中で立ち往生し、カメラマンは泣きはらす。そこでガコンっとハンドルを叩くと車のバッテリーだけ生きててラジオがつき、音楽がかかる——絶対イイよ、Aちゃんに撮ってもらおう、音楽は俺がやる、と僕らは興奮した。だが次第に、友人が演技をすることと現実の彼とのギャップに気付き始めると笑いが止まらなくなる。勝手に恥ずかしくなり、深夜ノリも相まって文字通りソファで笑い転げる。ヒー。もちろんこの映画が撮られることはなかった。しかし、もしその計画が実現してフィルムの中に友人が収められたとしたら、役者でもない普段の彼と演技をする彼を見分けられるだろうか。ロケット打ち上げニュースとスタジオのセットで撮影された宇宙船がカットバックでつなぎ合わされると虚実が曖昧になるように、同じフィルムに焼き

付けられたドキュメントと劇映画を見分けられるだろうか（あるいは、文字の上で小説とエッセイを見分けられるだろうか）。

闇夜に浮かぶレストランは時折、宇宙空間を彷徨う探査機を思い出させる。真夜中、郊外のガストはそんな気分にさせるには打ってつけだ。無責任で途方もない小鳥のさえずりを乗せた宇宙船。たとえばそれが一九七七年のボイジャー計画で打ち上げられた探査機だったとしたら。そこには、異星人へのメッセージが吹き込まれた、かのゴールデンレコードが搭載されている。五十五の言語の挨拶と地球の自然現象を収めた画像、世界の音楽、犬、羊、クジラの鳴き声、小鳥たちのさえずり。ゴールデンレコードの小鳥たちは何を喋っているのだろう。どうでもいい与太話かもしれないし、映画の計画かもしれない。異星人が聞いたら気絶しそうな信憑性が全くない哲学の議論かもしれないし、独自すぎる文学論、トンデモ映画論かも知れない。ＮＡＳＡはそんなことも分からずに太陽系の彼方へ小鳥のさえずりを放出してしまった。ボイジャー計画は失敗だったと言わざるを得ないだろう。

電線の上でぼくらは出会うべき

夜中に散歩をしていると発見がある。知らない道だったり、百円自販機や、思わぬ場所に公園を見つけたりする。人通りが少なかったら外観が気になる家を観察するのも面白い。ちょっと前に散歩をしていたらまだ人が住んでいない四棟の集合住宅をみつけた。なぜだか昔から、こういった建設中〜入居者募集中の建物にそそられる。今は外から眺めるだけだが、そういったものを見つけると引き寄せられてしまう。解体中の家が好きだという友達がいて、彼は夜中に写真を撮りにいったりするらしい。親戚のようなタイプなので気持ちは分かる。

子供の頃は中に入ることがよくあった。世間で言う不法侵入だが、もちろん全て時

効だ。作りかけのマンションの一室や、友達が引っ越していったばかりの空き家に突入してみたり（なぜか鍵がよく開いていた）、猫みたいに住宅街の塀の上を歩いて探検したりする。この「猫みたいなやつ」は小学生の時、本当にハマっていた。別に他人の家を覗きたいわけではなく、純粋に冒険として楽しんでいたが不可避的に人様の家の中が見えてしまう。お風呂に入っているばあちゃんや、自宅からものすごい近所なのに一度も会ったことがない人――身体的な理由で外出出来ない人も含め、色んな人がいた。漫画みたいな話だけど、ホウキを持って怒り狂うジイさんに追いかけられたこともある。こういう遊びばかりしていると、自分が住んでいる町の成り立ちが全く違って見えてくる。ハトやスズメにとって電線や電柱が止まり木であるように、カラスにとって人間のゴミ捨て場がエサ場であるように、自分にとって「塀」は家と家の境界であると同時に、遊び場であった。あそことあそこの塀が繋がっていて、この家の壁を登るとあそこの家の駐車場に出るな、というようなダンジョンだ。塀の上で野良猫と鉢合わせするなんてのもしばしばだった。

侵入好きなのは十代の間ずっと続いていた。東京の吉祥寺という街に、かつて某電

気屋があってデカい立体駐車場が併設されていたが、外に非常階段があってそこもこっそり入ったりしていた。上の方まで登ると新宿の都庁や東京タワー、都心の方が霞の中に見える。だからあの非常階段はＲＰＧでいう裏面へ通じる、隠し扉のような存在だったといえる。そこから吉祥寺を見渡すのは、新しいマップをゲットした時みたいな気分だった。

夜の学校のプールもご多分に漏れず侵入した。そのプールは三階建て体育館の屋上にあって、壁に打ち付けられた避難用ハシゴを登ったのは今考えると恐ろしい。その時、友達の一人が服のままプールに飛び込んだ。そうすると誰かが水の中に突き落とされる。堰を切ったように、皆なだれ込んだ。

「１９７９」というスマッシング・パンプキンズの曲がある。過ぎ去った十代を回想するような彼らの代表曲だ。ＭＶも素晴らしい。舞台は住宅地（決して都会ではない）。何をするでもなく車を乗り回すアメリカの典型的なティーン達。ホームパーティーの狂乱。バスルームで抱き合う男女。デコレーションのように木に向かって投げられた無数のトイレットペーパー（その美しさよ）。コンビニでの行き過ぎた悪ふざ

け。そして服のまま他人の家のプールに飛び込む。プールサイドのテーブルもイスも投げ込まれる。水しぶきが上がる。不法侵入といえば、このビデオの、このシーンを思い出す。

あまりに有名な曲だが、もし知らなかったら聴いてみて欲しい。歌い出しはこんな感じ。

Shakedown 1979 / Cool kids never have the time / On a live wire right up off the street / You and I should meet

拙い英語力で意訳すればこうだろう。

1979年を捜索／クールキッズには時間がなくて／路上から離れた電線の上で／ぼくらは出会うべき

好きなのは「電線の上で出会うべき」だ。a live wireとは生きているワイヤー、つ

まり電気が流れている電線のこと。どうして「電線」なのか――それは街に組み込まれた裏道だ。不法侵入は路上の目線から隠れて行われる。電線は塀や、避難用ハシゴ、非常階段と言い換えられるだろう。空き家でも、作りかけのマンションでもいい。日が当たる道はつまらない。整理された街並みも面白くない。猫のように塀の上を歩く。避難ハシゴをよじ登る。非常階段を上がる。退屈な街で動物のように遊ぶ。そうすると裏面があらわれる。そこでぼくらは出会うべき、と歌っているのだ。

昨日の夜、散歩がてらコンビニに行く途中で無性に「１９７９」が聴きたくなったので、YouTubeで検索してｉＰｈｏｎｅのスピーカーで歩きながら聴いてみた。夜中の散歩といっても粗大ゴミ用のシールを買いに行く程度だったのだけど、少しだけ楽しい気分だった。